
騎士? 1

I C E - T E A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士？1

【Nコード】

N4843P

【作者名】

ICE-TEA

【あらすじ】

「おまえは魔術師だ。」

祖父と二人で暮らしている瞬一は、中学生のころ、そう告げられた。その日から、瞬一は魔術の練習に励んできた。自分が魔術師であることは、恋人にも告げていない。

が、今、高校生になった瞬一に、祖父は新たな課題を出した。

「騎士戦にでろ。」

瞬一の挑戦が始まる！

ことの始まり

騎士？ 1

ICE - TEA

16歳の少年が真夜中、海沿いの国道をママチャリで突っ走っている。青い七分のズボンに、白いTシャツ、白いパーカーを羽織っている。身長は176cmほど。驚くほど整った顔に微笑を浮かべている。この少年が走っている国道には、ガードレールもついていない。国道とは名ばかりで、実に危険な道だった。少年の進行方向左側には海が押し寄せる。このあたりの砂浜は5年ほど前に消滅した。今はただ、荒れ狂う波が5メートルはあろう岸壁にあたり、虚しく消えてゆくだけだ。

さて、この少年は「普通」ではなかった。最も、真夜中にママチャリで国道を走っている事自体、「普通」とは呼べないが。まず「普通」ではないのは、ママチャリのスピードだった。優に時速100キロを超えている。ママチャリで時速100キロを超える事はない、というのは世の中の常識である。

さらに、これだけのスピードで走り続けているのに、息が切れない、というのも「普通」ではなかった。呼吸は、まるで寝転んでいるかのように穏やかだ。前髪は、はらりと形の整った眉の辺りにかかったままだ。少年はふつと笑った。この世に怖いものはない、という確信を持った男の笑顔だった。しかし、一瞬の後、彼の笑顔が曇った。「普通」の人間には聴き分ける事はおろか、聴き取る事さえできない、遠いところから聴こえてくる音を耳にしたのだ。そして少年は、眼を細くして後ろを振り返った。一歩間違えれば、海へまっさかさまだ。彼の眼が鋭く光った。そして、少年は6キロほど後方に、2台の自動車を見た。1台はスポーツカーで、真赤。もう一台はリムジンで、真黒。

「ちえっ」

少年は短く息を吐いた。そして視線を前にもどし、チラリと左の海を見た。それから、ニヤリと笑みを浮かべ、大きく左にカーブを切った。

ママチャリは大きく弧を描き宙を跳んだ。そして降下して、荒れ狂う並みの上に「着水」した。

「これであいつもわからないだろう」

少年はそうつぶやくと、波の上を矢のように沖へと進んでいった。残されたのは、吼え続ける波の音だけだった。

「爺ちゃんただいまあ」

暗い洞窟に、少年　こと光命瞬一、16歳　の声がこだました。「やっときたか」

怒ったような、でも少し心配そうな声が上のほうから降ってきた。

「今日は大変だっただろう。あすこの若いのが追ってきたんじゃないか？」

あすこの若いのは、瞬一のクラスにいる男子生徒だ。生徒の間の権力者で、先生さえも動かせる、悪質な人物だった。

「ご明察」

瞬一はぶすつとして答えた。

「あいつ、スポーツカーとリムジンなんか出してきやがった。マジでナイよ、あいつは。6キロくらい後ろにいた。ちょうど曲がってくるところだったからよかったけど」

「ふうん」

爺ちゃん　こと光命義輝　が、奥のほうにある古い階段から現れた。「普通」の「お爺ちゃん」にふさわしく、白髪にグレーのズボンとヨレヨレのYシャツ、その上に半纏を羽織っている。

「自転車持って早く上がって来い」

早くも階段に足を乗せながら、義輝は命令した。

「うん」

命令されたほうはシンプルに答え、自転車を軽々と持ち上げた。そして、祖父のあとを追った。

ところで。瞬一が帰宅したフロアを1階とするならば、居間は4階にある。しかし、一般的に言つと、瞬一が入ってきたフロアは地下3階だ。そして居間があるのが1階。その上に、2階がある。1階から上はごく普通の一軒家である。地下は、紙の上ではない事になっているし、その秘密を知るものは2人、すなわちこの家の住民だけである。地下の3フロアは貯蔵庫、金庫、様々な器具など、いろいろなもので埋め尽くされている。ただし、その中に、B2階を占領する大きさのものがあつた。祖父に「手を触れるな」といわれてきたその物体は、よほど大事なようだった。

自転車を担いで上がってきた瞬一は、B2階ではつと息を呑んだ。カバーがかけられていたその謎の物体のカバーがはずされている。そしてそこには、白い金属のようなものでできた何かがあつた。

瞬一は祖父に眼を向けた。義輝は誇らしげにっこりとした。

「これは・・・？」

瞬一は見たこともないものを指差した。

「これ？これは、シャチだよ。」

「シャチ？」

シャチはどうやら乗り物のようだった。入り口はついていない。祖父に眼で問いかけてからパンパンとたたくと、硬い。どうやら、シャチの使い方は瞬一の理解能力をはるかに上回っているようだった。困り果てて祖父の顔をうかがうと、彼は微笑した。

「乗り物だ。連邦で最新式のを買ってきた。」

そういわれてみれば、最近カバーの形が変化したような記憶がないこともない。瞬一はにっこりと笑った。

さて、今、義輝の口から何気なく出てきた 連邦 という言葉。こ

れについて説明するには、時間をかなり遡らなければならない。

ヒトが住んでいる世界とは、この世界の事である。すなわち、今瞬一や義輝が住んでいる世界。だが、もうひとつ、世界がある。第二の世界、魔界、連邦など、色々な名で呼ばれるこの世界は、連邦政府と呼ばれる政府が治めている世界だ。大昔から魔術師やエルフなどが暮らしていた。今も彼らはそこで暮らしている。ただ、ヒトの世界に移り住んできたものもいる。瞬一とその光命一族のように。光命一族は、魔術師だ。魔術師の中でも伝統、名誉共にトップクラス。いわば、華族のようなものであった。そして、あすこの若いのも魔術師の一家の生まれである。華族といえは華族なのだが、昔から「能力はあるのにもつたいない」とささやかれるほど、腹黒い一家だった。その昔、連邦政府の代表を暗殺した事件があった。犯人は分からずじまいだが、多くの人は、この一家が仕組んだと確信している。

「まあ、まず坐れや」

義輝は1階の居間につくなりそういった。瞬一は古びたソファーに腰掛けた。毎年修理に出そうといっでは忘れている、かなりの年代ものだ。坐るたびに、ぎしぎしと音を立てる。

「なに？」

「おまえ、騎士戦に行け」

「へっ？」

突然の命令に戸惑う。

「騎士つて・・・？」

「おまえ、その歳で騎士も知らないのか？」

「エ・・・う、うん」

「はぁ・・・じゃあ、俺が教えてやろう。騎士つて言うのは、10年に一度、連邦一の勇者を決める戦いだ。魔術のみを使って戦うんだ。騎士に選ばれれば、100年間、体力的、顔以外の身体の変化は抑えられる。そして、連邦の政治にも意見が言えるようになる。

賞金一〇〇〇龍金^{リウキン}も獲得できる。まあ、でも、何よりも名誉だな。で、今年は今世紀の騎士を決める年なんだ。どうだ？やってみないか？」

瞬一はうなずいた。ためらう気持ちは少しもなかった。

「オッケー」

考えてみれば、中学に入ったときに自分が魔術師だと知らされ、その日から魔術の特訓が始まったのは、この年のためだったのかもしれない。

「よし！」

義輝は立ち上がった。

「じゃあ、シヤチを見せてやろう」

2人は再び地下2階に降りていった。

シヤチは上から見ると、本当にシヤチのような乗り物だ。

「乗ってみな」

しかし、瞬一には乗り方がわからない。そういうと、

「わかるまで試してみる。そうじゃないとおまえが勝ち取った事にはならん」

勝ち取る？・・・ってことはくれるのか！瞬一は探した。どこだ？入り口。おい、どこだよ！入り口くーん！なかなか見つからない。クソ！と思って体当たりした。

と、抵抗が無くなった。

「え・・・？」

しかし、言葉を発するより早く、瞬一の身体はすっぽりと座席の中に納まっていた。ガラスのような材質の窓の外に、義輝の顔が見える。

「こ、これは・・・？」

義輝が何か話しているのが分かる。しかし、口の動きから言葉を読み取るのは難しい。瞬一はシヤチから首を出した。

「何？」

「これから運転の仕方をマスターしろといったんだ！」

そしてシャチを壁に向かって押し出した。

「でも、こんなところで・・・」

「横浜にいけ！山下公園の近くに、49階建ての高層ビルがある。その建物の50階が連邦への通行ゲートだ！俺は電車を使うからな！」

そして彼は笑いながらつけたした。

「新車を傷つけるなよ！」

次の瞬間、瞬一を乗せたシャチは壁に激突！・・・しなかった。

シャチは壁を突き抜けていた。

そして、瞬一の視界が一八〇度、回転した。彼の頭上に海底があった。水は入ってこなかったが、瞬一は動転した。操縦桿はどこだ？どこかにあるはずだ。戦闘機のようなのが。

しかし、彼が見つけたのは、たった一本のバーだった。彼はそれを手前に引いた。否、引こうとした。しかし、バーは動かない。瞬一はありったけの力を出してバーを引いた。そして押した。それでもバーは動かなかった。そのとき彼は思い出した。俺は魔術師じゃないか。瞬一は意識を集中させた。

爺ちゃんと言っていた。「魔術とはすなわち、限らない集中力をどこまで出せるかのじゃ。」瞬一はバーを握った。そして意識を集中させた。体勢を立て直せ。体勢を立て直せ。もうちょっとだ。いけるぞ！瞬一の頭の中に不意に恋人の顔が浮かんた。立て直せ！

と、不意にシャチが一八〇度回転し、もとにもどった。瞬一は集中を切らさなかった。更に意識をシャチに潜り込ませた。前へ、前へ、横浜へ！

その瞬間、ジェット噴射のような音がして、シャチが前方へ飛び出した。加速する。魚が驚いてよけていく。瞬一を乗せたシャチは魚の群れの中を、ただひたすら山下公園へと向かっていった。

海藻がシャチに絡みつく。瞬一は魔術を駆使してシャチを操り、それらをよけていった。海底には沈んだ船や、ごつごつした岩がたく

さん突き出ていた。それもよけなければいけない。瞬一はだんだん操縦のやり方がわかってきたと思った。いいぞ、この調子！ふと彼は考えた。ちょこつと遊んでやる。彼は海底すれすれまで降下した。そしていつきに水面へと上昇。そのまま水上でジャンプして水中にもどる予定だった。が、水面に顔を出す直前、大きな船の腹が見えた。外国から来た客船だろう。瞬一は衝突の40センチ手前であわてて方向転換した。衝突こそしなかったものの、身体が大きく揺れ、シャチの壁にしたたか頭をぶつけた。くそ。こういうときだけ硬くなりやがって。悪態をつくが、意味がない。そのとき、彼は信じられないものを眼にした。

潜水艦が、むかつてくる。そしてその窓からのぞいている顔は……
「卓也！」

あすこの若いの　こと暗夜卓也である。

やばい！心臓が早鐘を打つ。はやくここから脱出しなければ。瞬一は再び深くもぐると、海底から三メートルほど上を矢のように突っ走った。魚の驚いた表情が見える。魚たちはとても表情豊かだと、瞬一は思った。とにかく直進。振り切るためにはそれが一番いい。彼は急いで加速すると、後ろを振り返った。潜水艦はシャチほどの速度は出せない。百メートルほど後ろを必死に航行している。瞬一は更に百メートルほど差をつけると、思い切って海面に浮上した。現在位置を確かめねばならない。が。

サーチライトが彼を照らした。ヘリコプターが海面すれすれを飛行していた。乗組員が大声で上司に向かって何か叫ぶ。すぐに返答があり、シャチめがけてロープが投げられた。「こちらは海上自衛隊。不審船に警告する。直ちに浮上しなさい。繰り返します。不審船、直ちに浮上しなさい。」

人様を「不審船」とはなんという無礼者！と瞬一は思ったが、つぎの瞬間、ありったけの意志を動かして、シャチを避難させなければならなかった。自衛隊員のダイバーが海の中に入ってきたのだ。瞬一は急いで潜水した。シャチは思い通りに動いてくれた。

再び海底まで潜ったシャチを、瞬一はすばやくジグザグに動かした。ダイバーは振り回されてついてこられない。振り切った！瞬一はガッツポーズをした。しかし、次の瞬間、シャチが空中に持ち上げられた。

「え……？」

しかし、乗組員の意志とは関係なく、シャチは釣りあげられていく。「うわわわわわ」

瞬一はあわててレバーにつかまった。一体、どうなってるんだ？

と、シャチはついに水面に顔を出した。そして、胸ビレが空気にさらされ、ついには尾びれが……！

シャチはどんどん速度を上げて空中を上昇する。隣には現代的な高層ビルがある。何度も窓ガラスにぶつかりそうになりながら、瞬一は昇り続けた。下を見ると、何もできずにただただ状況を見守る警察官が見えた。警察から逃げられたことは確かだが、シャチはどこへ？

そして、バリーンという派手な音とともに、シャチがビルの最上階に突っ込んだ。が、窓ガラスにシャチが当たる瞬間、ビルの最上階は、シャチと瞬一もろとも、消えた。

そして、そこには……

「じいちゃん！」

義輝がいた。

「瞬一、おまえはまだまだ駄目だのう。どうやって逃げるつもりだったんじゃ？」

「……」

「まあいい。とにかく、連邦 ゲート、横浜駅えようこそ。」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4843p/>

騎士? 1

2010年12月14日01時33分発行